第５回火山都市国際会議ー地方都市の挑戦．市民参加型会議の成功

International conference of Cities on Volcanoes 5 in Shimabara 2007 – a challenge from a small city

火山都市国際会議島原大会事務局 松島　健 [1]
Matsushima Takeshi Secretariat of Cities on Volcanoes 5 Conference[1]

[1] -
[1] -

http://www.citiesonvolcanoes5.com/

アジアで初めての開催となった火山都市国際会議（Cities on Volcanoes Conference 以降 COV）の第５回大会が，平成 19 年 11 月 19 日～23 日にかけて長崎県島原市で開催された．大都市や観光都市での開催が多かったこれまでの国際会議と異なり，人口 5 万人余りの小都市での開催．しかも数日間にわたるようなイベント自体が初めての島原市にとっては，少々チャレンジングな大会であったが，大盛況のうちに終了することができた．

COV は，火山災害の軽減のために，火山研究者だけでなく，火山学以外の分野の研究者，火山災害に関係する行政・技術者，地域住民，マスコミ等が集まって活動的火山と都市との共存を目指して情報と意見交換を行うもので，国際火山学地球内部化学協会（IAVCEI）の Cities and Volcanoes Commission がほぼ 2 年ごとに開催している．

島原市は 1990～95 年の雲仙・普賢岳噴火にともなう火砕流・土石流により大きな被害を受けたが，火山活動終息から 10 年がすぎ，見事に復興をとげることができた．この「災害からの復興」の総仕上げとして，災害から学んだ多くの教訓や英知を世界に発信することが重要と考え,「市民参加型」を全面に掲げた COV を目指した．

大会には世界 31 カ国の 600 名の研究者らが島原に会した．市民には無料で大会を公開し，期間中に訪れた市民は 2100 名を越えた．また会場では英日同時通訳を行うとともに，日本語の講演予稿集も作成して配布した．地元の CATV 局やコミュニティFM 局の会場からの中継，インターネット放送も行われた．

551 件あった学術発表では，科学研究発表のほかに，噴火当時に実際に被災者の治療や救護にあたった医師や看護婦，市役所防災担当者，当時取材にあたっていたマスコミ関係者からの発表もあった．また高校教諭が毎日のように撮影した定点写真による溶岩ドームの変遷動画なども関心を集めた．高校生や地元団体によるによるポスター発表会も盛況で，コアタイムには人で溢れた．

大会中日に実施された巡検では，地元の語り部が噴火の体験を島原弁で語り，それを地元の英語ボランティアが通訳するという試みも行われた．また噴火中に被害をうけた市内の小中学校を 3 班に別れて訪問した．参加者は噴火災害の教育や伝承に関する子供達の取り組み（寸劇や合唱など）を見学し，子供達との交流を深めた．子供達の災害教育への熱心な取り組みと災害当時の悲惨さを感じ取り，涙する参加者も多く見られた．

また，市民参加型の行事として，子ども火山フォーラム（こども火山発表会，地球を丸かじり！キッチン火山実験，火山学 Q&A 世界の火山学者に直接聞いてみよう），国際ボランティアフォーラム，災害時の報道について討論したマスコミフォーラムなどにも多くの市民が訪れた．さらに，夕方からのパーティや街なか交流において多くの市民がボランティアとして参加者をもてなした．

このように，今回の国際会議は、研究者や行政・防災関係者に加え、住民も一体となった**「住民参加型の国際会議」**という新しい形の国際会議を生み出した．閉会式での参加者代表のコメントで「こんなに住民が協力的な大会は COV でも，いやその他の国際会議でも見たことがない．素晴らしかった」と絶賛を受けた．大会終了直後から，会議の成功のお祝いや住民への感謝のメールやお礼が山のように寄せられており，大会後の交流も続いている．市民が得た自信と英知は大きな財産となり，今後の都市（まち）作りに行かされるであろう．